

日本の歴史 22

『後藤新平：夢を追い求めた
科学的政治家の生涯』

八田晃夫著；磯貝正雄編著（文芸社 2008年）

本書の請求記号 289.1-Hat

稲垣 宏行

明治時代の政治家、後藤新平（1857-1929）は、医者を経て明治一六年に内務省に入り、台湾の衛生局長や満州鉄道総裁を務めました。国内でも通信大臣、鉄道員総裁、東京市長など多くの要職を歴任した人物です。

本書は故人八田晃夫氏が執筆した『後藤新平略史』を、編著者の磯貝正雄氏が補筆・補正したものです。八田氏は後藤のことを自分の父親と重ねているのではないかと磯貝氏に言わせるほど、後藤に対する思い入れを示しています。

『科学的政治家』と言われた後藤は、事前に綿密な調査を行い、科学性に基づいた合理的な政策を生み出しました。このことについては、台湾の民政長官に就いた頃の政策に色濃く表れています。現地では疫病、麻薬、盗賊が猛威を振るっていました。後藤は、盗賊には前非を悔いて投降すれば罪を免除するなどの穏健策で対処しました。コレラやマラリアなど、疫病に対しては血清の研究や現地の人々の心の安寧に取り組む「公医」を制度化することで根絶に成功しました。麻薬については、無理に取り締まるのではなく、麻薬販売を専売制とし服用を公認する一方、新規服用者は認めないという漸禁的な対策で徐々に減少させ、その結果、多大な利益も獲得しました。この麻薬の専売で得た利益は、台湾事業公債の償還費に当てられました。

これら一連の政策は、台湾の文化や実情に合わせて無理がないように配慮されたものであります。この政策に代表される彼の政治姿勢を評して本書は、後藤に韓国の統治も任せていれば、後年、人々から恨みを買うこともなかったものと見ています。

このように後藤の手法は、文字通り科学性が高いこともさることながら、穏和な政策であったことが分かります。さらにこの姿勢は、日露戦争後に赴任した満州の統治政策にも表れます。

明治三九年の満州鉄道総裁時代、後藤の政策の基本は「文装的装備」という言葉で表現され

ていました。これは、彼が満州において整えるべきは、工業や農業の奨励、鉄道・港湾の整備などの都市事業計画で、軍備以外の事業にあるという観点から出てきた政策です。また、これらの事業は有事の際に軍事力へと転換できると考えていたようです。まだ満州政策へ日本の軍部の影響が少なかった時代とはいえ、このような現実に即した政策を実行できたのは、ひとえに後藤の手腕によるところが大きいと思います。加えて、後藤はココフツォフ蔵相などロシアの要人と親交を深め、日露戦争で荒廃した両国の関係面でも大きく貢献しました。

その後、国内に戻り通信大臣や東京市長などを歴任して敏腕を振りました。電話の普及、私鉄合併による鉄道の国有化、国鉄および東京市の職員の人事刷新は、後藤の功績の一端です。東京市長を辞任し日露協会会頭となった後は、豊富な海外経験を生かし、ソビエト政府との友好にも尽力しました。

後藤新平を福沢諭吉や新渡戸稲造などと比較すると、不思議なことに歴史上で大きく取り上げられませんが、彼がその生涯において交流してきた人々は、歴史的に有名な人々の多いことが本書から見て取れます。日本では兄玉源太郎、伊藤博文、桂太郎。海外では前述のココフツォフや同じくロシアの極東全権大使ヨッフエらとも親交がありました。本書巻末には、人物や地名、事件に関する解説も五十音順に掲載されています。後藤と繋がりがあった事柄についての知識を深め、後藤の人物像についてより深く知る一助にもなることでしょう。

このような科学的政治家と呼ばれ、評価の高い後藤の手法と業績を理解することは、今日の停滞している社会現象を打開するきっかけとして、参考になるのではないかと評者は考えているからです。

政策から見える後藤新平という人物

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）